

マルサスの大陸旅行記（1825年）

柳田芳伸

訳者序言

ここに訳出を試みるのは、Patricia James ed., *The Travel Diaries of T.R.Malthus* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1966), pp.228-43の全訳¹⁾で、マルサス(Thomas Robert Malthus, 1766-1834) 一行²⁾が1825年の夏(6月2日~8月5日)に行なった大陸旅行(フランス北岸部、フランドル地方を中心としたベルギー、東部オランダ、西部ドイツ) [図1.参照]に関する日誌である。それゆえ、付属されている「旅行中の現金収支」部(pp.244-52)に関しては、ジェームズ³⁾(Patricia James, 1917-1987) 婦人による「現金収支」の総記部のみの訳載にとどめている。確かに、都合200ポンド弱にも及んでいる路銀の内訳にも興味が引かれる。例えば、5人の入国用の身分証明書⁴⁾(6月2日)に5ポンドも要したり、5人の1晩の宿泊費が2ポンド程度であったり、あるいは様々な寸志⁵⁾以外にも時折洗濯代(Washing)や靴下の補修費(Ladder)に心を砕いたりしていることも蔑ろにはできない。わけても、

図1. マルサスの大陸旅行の順路



(注) Patricia James ed., *The Travel Diaries of T.R. Malthus*, 1966, P.229より。

7月12日に7シリングをも費やして、ハリエツタ夫人に長い靴下（stockings）を購入している点などは見過ごせないであろう。なんとすれば、マルサスは靴下「をはく人（wearer）の愉楽（comfort）と便宜（convenience）」を根拠にして、靴下を明確に「生活の便宜品（conveniences）」と規定している⁶⁾からである。しかしここでは、その巨細には立ち入らない。

さて、本旅行は、マルサスが1826年2月27日付でテニソン（George Tennyson, 1750-1835）に宛てた文面に基づき、5月23日の愛娘ルシー（Lucy, 1807-1825）の客地（ハンプシャーにあった母方の叔父宅）での頓死（結核）に伴う傷心旅行と位置付けられてきた⁷⁾。その真相は、おそらくは、もともとこうした旅行の腹案があって、ルシーの急な病死による感傷を少しでも癒せればとの願いから敢行されたものと推される⁸⁾。それゆえ、この「マルサスの観光旅行記はまとまりがなく、寸評付きの旅行記の域を出ていない」との短評には、訳者も異論はない。ただ、注視すべきは、「とはいえ、幾つかの特色ある記述がある」と付記されている⁹⁾点である。もとより、1820年の夏に、マルサス達より先んじて、一部重なる地域を周遊したりカードウ（David Ricardo, 1772-1823）の大陸旅行記¹⁰⁾との比較対照も可能ではあろう。けれども、本序言では、マルサスが経済学者として本旅行記に書き留めようとした諸点に着目していくことにする。

すなわち、これまでのマルサスの旅行記の探索の大半は、当該旅行がマルサスの思索や執筆にどのように反映されていったかに焦点を合わせてきたと概括しても大過ないであろう。これらに対し、ここでは、マルサスがどういう経済問題に最後まで拘泥していたかを俎上に載せ、確認していきたいのである。というのも、マルサスは本旅行時には、既に『人口論』の改訂作業をほぼ終え、かつまた「老マルサスのさいごの成熟した見解を示す」¹¹⁾とされている『人口論綱要』（1824年）さえも1823年5月には脱稿していて、新たに付加すべき材を持ち合わせていなかったと考えられるからである。こうした視点から、マルサスが極めて意識的に本日記や翌年の『スコットランド旅行記』の中へ一見唐突に盛り込んでいる事項を噛み砕いておくことも強ち徒爾ではないであろう。

まずは、面倒を避けるため、しばしば登場してくる通貨単位を整理しておきたい。訳注〔4〕にあるように、1フランは20スーで、またこのうちスーはペンスとほぼ同値とみなされている¹²⁾（6月10日）。加えて、7月2日の記述では、1フローリン4スタイバーが2シリングと等値されている。1フローリンは28スタイバーであるから、1シリングはほぼ16スタイバーに匹敵することになる。

されば、マルサスが1日の労賃を7～30スーと見積もったり（6月6日、6月10

日、6月17日、7月6日、7月11日)、あるいは夏場の通常労賃を2シリングと書き記している(7月2日)のも決して現実離れではない¹³⁾。同様に、3.5ポンド(約1.6キログラム)の精白小麦パンを3~5スー強(6月6日、6月10日、6月29日)と自記しているのも的外れではない¹⁴⁾。但し、1814~1825年のロッテルダム市場からの輸出穀価(7月2日)は同期におけるイギリスの穀価の推移¹⁵⁾と対比すると、半値余り程度となっている。これはイギリスの打ち出した穀物法政策の帰趨と言えよう¹⁶⁾。しかしより子細に閲するなら、このことよりも、むしろ、専ら消費者がパン屋から購入している国々¹⁷⁾におけるパン価格の挙示に限られていて、ことドイツについてはマルサスが一切例示していない点に引き付けられもする。19世紀中葉までのドイツでは、穀物の「個人への販売」¹⁸⁾が無視できず、私有の、または共同のパン窯による自家製パンもかなり一般的であった¹⁹⁾と推知される。パン屋からの購入の場合であれ、総じて、「家でこねたパン生地」を「パン焼き業者(Bäcker)」に預け、「パン焼き賃」を払って²⁰⁾、パンを入手していたものと考えられる。マルサスはおそらくこうした模様を見聞していたと推断されるのに、この史実にはさほど頓着していなかったように思われる。

次いで、穀物の生産という側面に目を転ずると、マルサスが一再ならず共同耕地に視線を送っているのに気付かされる(6月7日、7月11日、7月13日、7月21日)。紛れもなく、アウデナールデでは、解放耕地が残存していて、間々0.1ヘクタール以下に分割されていた²¹⁾。また西部ドイツのライン川沿いにも、村落と解放耕地とが散在していて、定期的にくじによって各農民に割り振られた耕地が三圃式輪作で耕作されていた²²⁾。もちろん、フランドル地方でも富裕な借地農業者が資本主義的大農場を経営し、市場向け生産をなしていた²³⁾けれども(6月12日、7月6日)、マルサスがしっかりと共同耕地を視野に収めていた点にも着目しておくべきであろう。

感懐をもう1つ覚えている。それは、マルサスの木々に関する観察が1799年の『北歐旅行日記』のそれと比況すると、極めて皮相に終始しているとの所感である。なるほど、マルサスは白ポプラを中心に様々なポプラを目にし(6月8日、7月8日、7月21日)、併せてその際ブナ、モミにも目を留めてもいる(6月10日、6月12日、6月17日、7月5日)。それに、毛虫の害によるオークの落葉をも書き付けている(7月6日)。しかし6月21日には榆の木を目睹しながらも、単なる木々のように描写している。これは、イングランド各地を駆け回ったことのあるマルサスとしてはとても上面の記述であるように解しうる。というのも、榆はイングランドの諸所で異なる植物相を呈していた²⁴⁾はずであるにもかかわらず、ここからは『北歐旅行

日記』における鋭敏な活写²⁵⁾の類を微塵も読み取れないからである。

他にも物足りなさを感知することがある。マルサスは6月27日、忽然として「ライデンの人口はベルギーやフランスの大抵の町と同様に減ってきている。」と書き加えているものの、この個所以外には人口に関連する記述は見当たらない。このこと自体はマルサスが探訪した諸国における当時の人口調査の不十分な整備²⁶⁾に起因するものとして、不問に付しえるかもしれない²⁷⁾。けれども、マルサスが各国の救貧の近況に一切触れていないのは頗る不可解である。なぜならば、マルサスは2版『人口論』（1803年）以降の後続諸版において、ハンブルグの救貧施設やランフォード（Reichsgraf von Rumford, 1753-1814）がバイエルン（ミュンヘン）で開設した救貧院に言及している²⁸⁾からである。フランスのブルボン復古王政下では、「浮浪者・貧困疾病者などを施設に収容・隔離し、一方では教区単位で個々に慈善活動が行われといた²⁹⁾。加えて、1818年にはカトリック的博愛主義に立脚して、貧困家庭訪問員が各家庭を回り、生活物資の支給や医療支援を開始してもいた³⁰⁾。また、1801年に人口60万であった東フランドル州でも、6万人足らずの貧民が何らかの救済を受けていた³¹⁾。同様にオランダでも、救貧機関が現物を貧民に支給すると共に、孤児院をも運営していた³²⁾。プロイセンに至っては、1794年2月5日にプロイセン一般ラント法を制定し、従来のような貧民救済を整理した上で、救貧保護を公的責任と位置付けていた³³⁾。どうして、マルサスはこうした事情に一言も書き添えていないのだろうか。おそらくは、マルサスの眼孔にはそれらは並べて次のように映じていたのであろう。すなわち、マルサスは「勤勉で自立した労働者を育成しようとする路線³⁴⁾」を強く提唱し、原則的に貧者の救済権を否定していた、客地での救貧状況はおよそこの見解に背馳するもので、プロイセンの救貧策を除き、いずれの施策も遠からず貧民の怠惰を助長する羽目に陥っていく³⁵⁾と展望、危惧していたのであろう。

なお、細事ではあるけれども、調理された昼食が午後1時半頃に取りられるようになったのは1850年代のことである³⁶⁾ならば、マルサス達が7月下旬に昼食（Lunch-eon）を楽しんでいたことにも注視しておかねばならないし、さらには、晩年のマルサスが色彩感覚を弱化させた経緯を考え合わせれば、衣服や家屋の何気ない色合いにも目線を止めている（6月9日、6月11日、6月12日、6月27日、7月10日）のも忘失できないかもしれない。

（注）

- 1) この日記の前半部は、既に、小林時三郎「マルサス旅行日記 ― 一八二五年大陸旅行（上）」

- 」『文経論叢』第7巻第4号(弘前大学人文学部、1972年)において紹介されている。ここには、ジェームズ女史による原注が洩れなく翻訳されていて、至便である。
- 2) この旅を共にしたのは、マルサス夫妻、長男ヘンリー(Henry, 1804-82)、長女エミリー(Emily, 1806-85)、及び寡婦となっていたマルサスの妹(Mary Anne Catherine, 1771-1852)の都合5人であった〔小林同上論文29頁〕。
 - 3) ジェームズ女史については、取り敢えずは、マルサス学会編『マルサス人口論事典』(昭和堂、2016年)264-5頁を参照。
 - 4) ジョン・トーピー著藤川隆男訳『パスポートの発明』(法政大学出版局、2008年)99-102頁。
 - 5) この旅行において、マルサスは自家用馬車を用いず、定期馬車便や御者付貸馬車を利用し、運賃と共に多くの謝礼(道案内人や手荷物運搬人も含めて)を払っている。
 - 6) 吉田秀夫譯『マルサス 経済学原理』(岩波書店、1937年)下巻163頁。ちなみに、マルサスは今般の旅行においても靴下も靴も装着していない婦女子に再三にわたって目を止めている〔6月11日、7月2日、7月12日、なお、マルサスは1799年に成就した北欧旅行の際に、素足のノルウェー人に何度も視線を落としていた、拙論「マルサスの『北欧旅行日記』瞥見」『長崎県立大学論集』第36巻第4号(長崎県立大学学術研究会、2003年)98頁〕。
 - 7) Patricia James, *Population Malthus* (London:Routledge & Kegan Paul, 1979), pp.407-8.
 - 8) 小林前掲論文28頁。
 - 9) James, *op.cit.*, p.408.
 - 10) P.スラッファ編堀経夫訳『デイヴィド・リカード全集第X巻』(雄松堂、1970年)223-70頁。ちなみに、リカードウのこの旅行を評して、「絵や建築には一般的な関心を示しているが深い造詣をもっていたわけではなく、またとくに旅行観察のための準備や研究をおこなっていたわけでもない。リカードウは家族とともにくつろいだ観光旅行がしたかったのである。」〔中野正「リカードウの『大陸旅行、1822年』」『リカーディアーナ 季報4』(雄松堂、1970年)13頁〕との概評は言いえて妙であろう。
 - 11) 小林時三郎訳『マルサス人口論綱要』(未来社、1959年)213頁注3、また同書184-5頁も参照。
 - 12) なお、マルサスは5版『人口論』中で、フランス革命の前には、1ペンスは約2スーであったと概算している〔吉田秀夫譯『各版対照 人口論』(春秋社、1949年)II 135頁〕。
 - 13) 例えば、ベルギーでは、1日あたりの賃金は精々1~2フランであったし〔F.メンデルス、R.ブラウン他篠塚信義ほか訳『西欧近代と農村工業』(北海道大学図書刊行会、1991年)172頁やW.C.Henderson, *Britain and Industrial Europe 1750-1870*, 3rd ed.(London:Leicester Univ. Press, 1972), p.123〕、またオランダでも、夏場の賃金は18~25スタイバー程度であった〔J・ド・フリース、A・ファン・デア・ワウテ著大西吉之・杉浦未樹訳『最初の近代経済』(名古屋大学出版会、2009年)579頁〕。ちなみに、ドイツのバルメン(製造業地域)における男子労働者の週賃金は2~5ターレル(Thaler、例えばプロイセンの1ターレルは銀16.7グラム)であったと推計されてはいる〔ハンス・モテック著大島隆男訳『ドイツ経済史1789-1871年』(大月書店、1980年)167頁〕。そして以上のような概観を踏まえて、マルサスは2版『経済学原理』の中で、大陸の普通労働を1日あたり「14ペンスまたは16ペンス」と見積もっていると推される〔吉田譯『マルサス 経済学原理』上巻210頁〕。
 - 14) W・アーベル著寺尾誠訳『農業恐慌と景気循環』(未来社、1972年)291-2頁。例えば、パリ

では、食料暴動を回避するためにパン価格が1リーヴル（1キログラム）あたり3スーを越えないように監視されていた〔ルイ・シュヴァリエ著喜安朗ほか訳『労働階級と危険な階級』（みすず書房、1993年）252頁〕。また、1820年代のイングランドのパンは概して、4ポンド（約1.8キログラム）あたり10ペンス足らずであった〔Christian Petersen, *Bread and British Economy, c.1770-1870* (Scolar Press, 1995), pp.295-9〕。なお、フランスやオランダ、あるいはドイツの貧者の多数はベルギーの「普通の人たちの主食」（6月10日）と書き込まれているより廉価の黒（ライ麦）パンを口にしていた〔G.ルフラン著小野崎晶裕訳『労働と労働者の歴史』（芸立出版、1981年）191頁、J・ド・フリースほか前掲訳書591頁、及びハンス・モテック前掲訳書169頁〕。

- 15) 例えば、マルサス学会編『マルサス人口論事典』（昭和堂、2016年）34頁。
- 16) W・アーベル前掲訳書267-8頁、J・ド・フリースほか前掲訳書208頁、及びギュンター・フランツ著高橋清四郎訳『ドイツ穀物取引史』（中央大学出版部、1982年）216頁を参照。
- 17) スティーヴン・カプラン著吉田春美訳『パンの歴史』（河出書房新社、2004年）13頁、とりわけ、多い所では200人あたり1人以上のパン屋がいたとされるオランダでは、「都市民のほぼ全員と農村住民の大半が、穀物を購入し自分でパンを焼くことをせずに、パン屋で購入した」と大観されている〔J・ド・フリースほか前掲訳書490、495、587頁〕。
- 18) ギュンター・フランツ前掲訳書202頁。
- 19) 舟田詠子著『パンの文化史』（講談社、2013年）195-206頁や、谷口健治著『ドイツ手工業の構造転換』（昭和堂、2001年）75-6、81頁を参照。もちろん、当時のドイツにパン屋がなかったわけではない〔舟田同上書258-69頁〕。
- 20) 舟田同上書136頁、ギュンター・フランツ前掲訳書193-7頁、及び谷口同上書88-90頁。
- 21) F.メンデルス他前掲訳書180-1頁。
- 22) クラパム著林達監訳『フランス・ドイツの経済発展 1815-1914年』（学文社、1972年）上巻33-4頁。
- 23) F.メンデルス他前掲訳書175-6、179-80頁。概観すれば、北部では大農場が形成されつつあるのに、南部では極大農場が解体しつつあった。それは、「フランドルでは小耕作者のほうが大借地農業者よりも生産性が高いのに、南部では逆に、大借地農業者のほうが小耕作者よりも高い生産性をもっていた」からと概説されている〔湯村武人著『英仏農村における十六-十九世紀の農業年雇の研究』（九州大学出版会、1984年）159-61頁〕。
- 24) オリバー・ラッカム著奥敬一他監訳『イギリスのカントリーサイド』（昭和堂、2012年）第11章。
- 25) 前掲拙論101-2頁。
- 26) 例えば、ウェスターゴード著森谷喜一郎譯『統計学史』（栗田書店、1943年）143-50、183-5頁を参照。ベルギーの最初の国勢調査は1829年で、オランダのそれは1829年に開始されている〔同訳書156-7頁〕。また、1815年にラインランドを吸収したプロイセンの人口調査の変遷に関しては、安元稔編著『近代統計制度の国際比較』（日本経済評論社、2007年）54-9頁に詳しい。ちなみに、マルサスは当代切っぴの人口統計論者と称されるオランダのケルセボーム（Willem Kersseboom, c.1690-1771）の著作（1748年）に注目を払っていながらも〔ボナア著堀経夫・吉田秀夫譯『マルサスと彼の業績』（改造社、1930年）571頁〕、実際に言及することはなかった〔ケルセボームの学績については、V.ヨーン著足利末男訳『統計学史』（有斐閣、

- 1956年）236-45頁、及び吉田忠著『近代オランダの確立論と統計学』（八朔社、2014年）第6章を参照）。
- 27) 今日では、例えば、J.E.Horn, *Bevölkerungswissenschaftliche Studien aus Belgien* (Leipzig:F.A. Brockhaus, 1854)、Ron J. Lesthaeghe, *The Decline of Belgian Fertility, 1800-1970* (Princeton Univ. Press, 1977)、J・ド・フリースほか前掲訳書50-62, 533-65頁、桜井健吾著『近代ドイツの人口と経済』（ミネルヴァ書房、2001年）等を通して多くのことを知得できる。
- 28) 吉田秀夫譯『各版対照 人口論』IV46頁注。なお、ハンブルグでの救貧の様子に関しては、S.クウィーン著高橋梵仙訳『西洋社会事業史』（ミネルヴァ書房、1961年）86-8頁や、小山路男編著『福祉国家の生成と変容』（光生館、1983年）112-3頁を参照。また、ランフォードが1794年に考案した貧者向けの精白玉麦とエンドウ豆のスープ等については、ウォルター・グラットザー著水上茂樹訳『栄養学の歴史』（講談社、2008年）25-32頁を参照。
- 29) 赤司道和著『19世紀パリ社会史』（北海道図書刊行会、2004年）2頁。また、平實著『フランス労働者政策史論』（晃洋書房、1976年）205-9頁も参照。
- 30) 赤司同上書3頁。
- 31) F.メンデルス他前掲訳書172頁。
- 32) J・ド・フリースほか前掲訳書590-1、621-25頁。
- 33) 小山路男編前掲書106-59頁。また、藤田幸一郎著『近代ドイツ農村社会経済史』（未来社、1984年）155-8頁も参照。
- 34) 柳田芳伸・姫野順一編著『知的源泉としてのマルサス人口論』（昭和堂、2019年）4頁。
- 35) 平前掲書181-5頁や、J・ド・フリースほか前掲訳書622-4頁を参照。
- 36) U・T・J・アークル著松村昌家ほか訳『イギリスの社会と文化200年の歩み』（英宝社、2002年）173頁、安達まみ・中川僚子編著『〈食〉で読むイギリス小説』（ミネルヴァ書房、2004年）60頁、及び川北稔監修『世界の食文化 17 イギリス』（農文協、2006年）153頁を参照。

凡例

1. 訳出に際しては、原文中のdash（—）は基本的に省略し、前後を関連付けながら進めた。
2. 本訳の日記という特質を鑑み、原文に散在している断片章句に関しては、訳者が適宜、それらをつなぎ合わせて、意識を試みている。それゆえ、時として、マルサスの真意を歪めていることがあるかもしれない。
3. テキストの原文〔Patricia James., *The Travel Diaries of T.R.Malthus*, pp.228-43〕に付されている多数の注記については、訳者の判断に基づき、必要最小限に絞って、通し番号に変換し、訳載している。なお、紙幅の関係上、削除した原注に関しては、訳者が適宜に亀甲で括った補記部において、これらを反映させるよう努めた。
4. 訳者による注記は亀甲内数字の通し番号で示した。

マルサスの大陸旅行記（1825年）

1825年6月4日（土曜日）

ドヴァー。海岸の岩肌に面して建ち並ぶ新しい建物。快い水浴場となろう。〔40キロ余りの海峡を〕蒸気船に乗ってカレー^[1]へと渡航、各自1.1ポンド。パリ・ホテルに宿泊、かなり良好で、かつ安価。

6月6日（月曜日）

カレー。1803年以来、改修されてきた新しい建物。昔日〔マルサス達は1820年夏に渡仏し、パリに5週間滞在した〕とさほど代り映えしていないようにみえる。刑務所通りにあるホテル・モーリス、その所在はとんでもない土地柄ではあるけれども、良好で適価。

各人4フランの長距離乗合馬車^[2]（diligence）に4時間乗り、ダンケルクへ。大半が砂だらけの荒野や、海沿いの砂丘。カレーで〔ソブリン〕金貨24・75〔ポンド〕を換金^[3]。労賃（Labour）は約30スー^[4]で、精白〔小麦〕パン^[5]は3スー。ダンケルクの近隣の労賃やパンもほぼ同額。

6月7日

ダンケルクは十二分に清潔かつ快活に建てられた町で、フランスにおける最良の町の一つ。港、道路、それに教会の正面にある三角形の切妻壁、それは巨大な10本の円柱からなり、その円柱にはコリント式に縦溝彫りが施されている。ホテル ドゥ フランドルスはとても良い。砂原を越えてのファーネス行の無蓋の4輪馬車（calush）^[6]は25フラン。ベルギーの国境にある小村に向かい、手荷物を開けられたものの、厳格な検査はなく^[7]、以後もなかった。その前に、砂原で二人から止められ質問を受けはしたけれども、検査はなかった。ファーネスで朝食、コーヒーと苳で5フラン。ニーウポールドの中心部までは小帆船（barque）で、各々わずか1フランの運賃。ニーウポールドからブルッヘまでそれぞれ2フラン。ディナーは2フラン、最高級赤ワイン（claret）の一瓶は1.5フラン。

この地方の大半は活気や精彩を欠いた共同耕作地（common field）であった。家畜やまあまあ小綺麗な農場の家屋が点在してはいたものの、侘しい地所であった。耕作は時には良好に映ったが、また時として劣悪にも思えた。作物の出来は明らかに順調であった。オーステンドから約3マイルに及ぶ大運河が開通し、様々なポプラ、すなわちアスペンや白いポプラからなる森を広げた。概して、この地は極めて低地で、十分には排水されておらず、草地の連続である。ブルッヘに近づくにつれ、

ますます樹木が生い茂り、心地よくなつた。ホテル・ラ・フルール・ド・ブレッドまでの手荷物運賃2フラン。

6月8日（水曜日）

8時にブルッヘ。ホテルはほぼ満室。

6月9日

その市場広場にある塔。ノートルダム教会、そして彫刻された説教壇。ミケランジェロによる聖母マリア像〔図2を参照〕。シャルル（Charles de Valois-Bourgogne, 1433-1477）と彼の娘マリー・ド・ブルゴーニュ（Marie de Bourgogne, 1457-1482）の墓標。聖人サルバドール（St Salvador, 1520-1567）。ヴァン・オス（Van Os）の手になる使徒ヨハネによる洗礼。キリストの復活はまだ掲げられていなかった。

図2. 聖母マリア像



（注）訳者所有の古絵葉書より。

エルサレム教会に足を運ぶ価値はない。〔ブルージュやヘントの婦人たちも羽織つた〕黒マント。白っぽい家並みはこの町の時代がかった雰囲気に合っていない。

ホテル・ラ・フルール・ド・ブレッドで並みのボルドー産ワイン2フラン。

6月10日

大きな帆船（Grand Barque）でヘントへ。各々の船賃は5.5フラン。ディナー代は含まれているが、ワインはない。普通のヴァン・ド・ボルドーは3フラン。赤ワインは4フランだが、美味しくない。それゆえむしろ1.5フランでヴァン・ド・ボ

ルドーを頂戴する。

船上にいる間の大半は、河岸がとても高く、この地の風景、すなわち主に色々なポプラやブナが立ち並ぶ両側の森林を目にすることはできなかった。通航の後半には、河岸も低くなり、小奇麗な家並みや普通の人たちの主食である沢山のライ麦を楽しめえた。労賃は〔1日あたり〕14スー、フランスの28スー。精白〔小麦〕パンは3・5ポンドで4スー、あるいは4ペンス

6月11日

ヘントの町は中世時代の富と壮麗の跡を残している。聖バーフ大聖堂は大理石の彫刻で横溢している。デルヴォー作の説教壇。ケスノイ作のトリエステ司教の像。聖ミカエル教会には、ヴァンディケ作のキリスト受難の絵があり、とても素晴らしい絵画である。でも、色褪せていて、不鮮明である。学院（Academy）にある別な複製画は良い状態であるけれども、高く評価されてはいない。ボクソンの彫刻家、ヴァン・クレーガー自身の唯一の肖像画もある。

女子修道院。町庁舎の両側のゴシック様式は華美を極めてい

靴下を身に着けていない婦人たちの木靴。荷馬車夫の仕事着である青い綿製のマント。

6月12日（日曜日）

シュヘルト橋やレイズ橋からの水遊び（swimming）は芸当であり、多数の平底

図3. 花（青色または白色）房を付けた亜麻を手で引き抜く作業



（意注ニテ抜キ引ニ内ルアノ花） 業作獲取

（注） 記者所有の古絵葉書より。

図4. 亜麻を逆様にして地面に立てる作業



（注）訳者所有の古絵葉書より。

の荷船には主にシャルルロワからの石炭が積み込まれている。

午後には、乗合馬車の1等席でブリュッセルへ。旅路の前半は2列のブナの木の間を駆け抜けた。地は平らかなれど、主に色々なポプラやブナからなる多くの木々のゆえに不愉快ではない。大きな樹木はない。殆どのライ麦の穂は鈴生りで、作柄は良好、また小振りの小麦を除き、大抵の大麦は黄ばみ始め、まさに穂になりつつある。亜麻⁸⁾の作柄は良好〔図3、図4、図5を参照〕。アールスト（Alost）からは小麦やライ麦の収穫物の運搬者、それに旅路の前半で出会った瀟洒この上ない立派で申し分のない家並み。旅路の後半は、藁葺の小屋や、イングランドと同様の起伏ある地であった。アールストやアセ（Assche）は無色純白で、快い。青い色の仕事着や素足の婦人たち。王立広場（Place Royale）にあるホテル・ベル・ビュー、公園は豪華に尽きる¹⁾。

6月13日（月曜日）

聖デュル大聖堂。説教壇。ケスノイが制作した彫像。デルヴォー作の2つの美しい彫像。公園に行き、園内のコーヒー・ハウスへ。

6月14日

ベルギー王立美術館〔1803年に開館〕〔図6を参照〕、現在は自然史博物館。ルーベンス（Peter Paul Rubens, 1577-1640）作の絵画のコレクション。

図5. 穀竿で亜麻の茎から子実を叩き出し、繊維状にしていく作業



(注) 記者所有の古絵葉書より。

図6. ベルギー王立美術館



(注) 記者所有の古絵葉書より。

デルヴォー作の精巧なヘラクレス像。リバーシュからアレ・ヴェルト²へ。

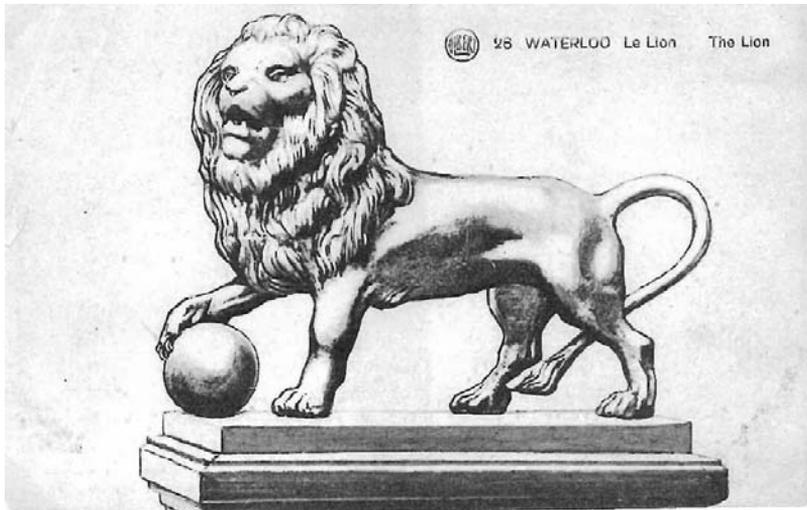
ウォータールーの〔南南東5キロ〕モン・サン・ジャンへ。ラ・ベル・アリアンス〔ナポレオンの本営があった〕の戦い〔1815年 6月18日〕の場であったラ・ハイ・サント〔農場〕へ。オレンジ（William Frederick George Louis, 1792-1849）王子が負傷を負ったとされる盛り土の頂上〔図7.参照〕にある〔28トンの铸铁製の〕ライオン像〔図8.参照〕へ。ウェリントン（Arthur Wellesley, 1st Duke of Wellin-

図7. 山頂にあるライオン像



(注) 訳者所有の古絵葉書より。

図8. ライオン像



(注) 訳者所有の古絵葉書より。

ton, 1769-1852) の記念樹は撤去されていた。

6月16日

礼拝堂の聖母教会へ。ドゥケノワ (Frans Duquesnoy, 1597-1643) が制作した彫像。プルミエ (Plimier) によるスピノーラ (Spinoler) の墓標。

6月17日

ブリュッセルを離れ、小帆船でボーム (Boom) へ。ブナとポプラの並木。王宮。

主には、乾草になる牧草。租税負担、わけても人頭税への不平不満。家屋税至っては、かつてのフランスよりずっと重い。ただ、フランスの課税は現行制度にも盛られてはいる。穀物の低価格への不満も続出。北部との競争で、農業者は肥料も買えない。労賃はホール(Holl)で1日あたり約7スー。アントワープへ。ホテル・デュ・グランド・ラブルールに。メール広場。王宮は威風堂々の極みで、大教会の塔は466フィートで、これまでに見た最高の美観である〔図9を参照〕。家屋は高く、切妻屋根。かつての巨万の富の爪跡である。

図9. アントワープのルンボルト（ノートルダム）大聖堂



（注）訳者所有の古絵葉書より。

6月18日

1797年に³損傷を受けたノートルダム大聖堂へ。ルーベンス作『キリスト昇架』〔1610-11年〕。『キリスト降架』〔1611-1614年〕。そして『聖母の被昇天』。2つ目はとても精細である。最初の『キリスト昇架』はあまり良くない、最後が最も見劣る。ケスノイ作の MARIA 像。ヴェルブルゲン（Verbruggen）作の聖人アンブローズの霊廟と説教壇。セント・ジェームズ教会⁴へ。

ヴェルブルゲン作の聖ペトロ像や、ウィレムセン（Willemsens）による聖パウロ像。ヴェルヴォールトが作製したコーデラ家、プーチン家のものも。ヴェルヴォールト氏による不滅を象徴した肖像はとても素晴らしい。

手すりには、G.ケリックス（Guillielmus Kerricx, 1652-1719）が刻んだオットー・ヴィーン（Otto Venius, 1557-1629）〔アントワープで活躍した画家、一時期、ルーベンスを指導した〕。ルーベン家の礼拝堂。聖パウロ教会。ルーベンス作『キリス

トの旗揚げ』は申し分のない絵画である。ルーベンスの『羊飼いの崇拜』も同様である。セルズ（Sers or Cels）作『十字架からの降下』〔1617-18年〕は壮麗な教会の壁部を飾っている。それはヴェルブルッゲン（Verbruggen）の手に成っている。ムサエウム（Musaeum）〔アレクサンドリアにおける知の拠点。プラトンのアカデミーなどの哲学の学校や図書館を含んでいた、プトレマイアによって設立されたとされる〕。ルーベンスによる十字架。ヴァン・ダイク（Anthony van Dyck, 1599-1641）の傑作。ルーベンス作の三位一体図は不出来

6月19日（日曜日）

礼拝、音楽、共に兵士の団体で全く満員である。大いに気を使う。

聖チャールズ・ボロメオ教会

イエズス教会

聖アウグスティヌス教会

ヴァン・ブリー（Van Bree）の手による聖アウグスティヌスからの洗礼は極めて現代的で、「幾許かの功德を、セルズさま。」

ヴェルブルッゲン（おそらくは、Jan Verbruggen, 1712-1781）作の大祭壇。

ルーベンス

ヴァン・ランカーの私的コレクション。オランダの作品集。

6月20日

ノートルダム大聖堂の塔。蒸気船でオランダの最初の町、一風変わったドルト（Dort or Dordrecht）〔現在は、ドルドレヒト〕へ。煉瓦造りの小ざっぱりした家屋は傾いている。教会。川の流域（Basons）。

6月21日

ロッテルダムを一見すれば、波止場と立派な立ち木〔楡〕と非常に高い家並みを伴った大運河に目を奪われる〔図10を参照〕。小さな煉瓦がきっちりと詰まっている。

6月22日（水曜日）

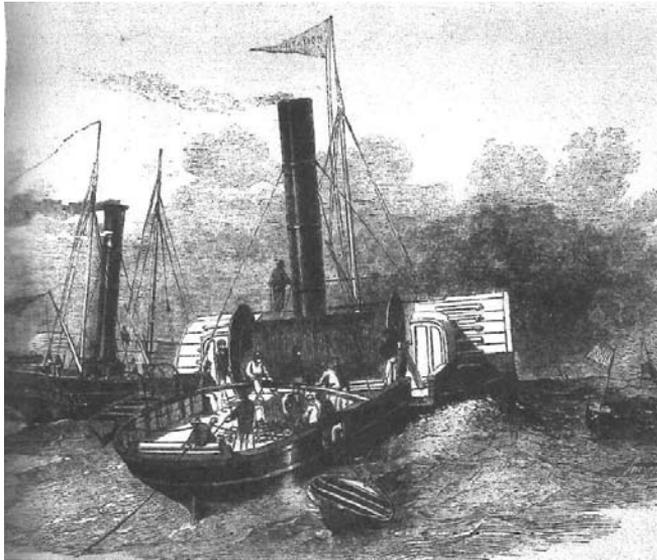
塔。田舎住宅（Country Houses）。運河は船舶（vessels）〔図11.参照〕で賑わっていて、明らかに商売繁盛である。最も活動力のある町に映った。アンダーソン氏からは、氏が在住されたこの20年の間に新開地に新しい家屋が建てられてきたとは聞知していない。租税はフランスの統治下にあった時の2倍である。政府から給されている牧師たちは大変規則正しい。十分の一税は存しない。いずれの宗派であれ、高官への道は開かれていて、近年ではユダヤ教徒が目立つ。プロテスタント教徒とカソリック教徒とはとても友好的に暮らしている^[9]。ナポレオンはかつて牧師たち

図10. ロッテルダムの一つの埠頭（アウデ・ハーフェン）



（注）訳者所有の古絵葉書より。

図11. 1840年代の vessels



（注）Nick Yapp ed., *The British Millennium* (Könemann, 2000), p.625より。

に支払われるように組まれていた予算を奪取した。国債の3分の2が帳消しにされ^[10]、現政府もこれを容認している。イギリス長老派教会の牧師たちはオランダにおけると同様に政府から支給を受けている^[11]。政府はその宗派を問わず自活できていない牧師に支援すると明言している。

6月23日

ディナーに際し、船(Boat)^[12]に乗り2時間かけて9マイルあるデルフト(Delft)まで、清楚なオランダの町である。教会。新教会〔図12を参照〕には、〔1584年にカソリックの狂信者によって暗殺された〕ウィレムI世(Willem I, 1533-1584, オラニエ公)や〔1583年にデルフトに生まれ、共和主義者となり、1619年に捕縛された〕グロチウス(Hugo Grotius, 1583-1645)の記念碑があり、旧教会には、〔1639年にスペイン艦隊をグラヴリーヌ沖で破り、チャルーズI世からナイト爵を付与された提督〕ファン・トロンプ(Maarten Harpertszoon Tromp 1598-1653)のものがある。バザーも。

図12. デルフトの新教会



(注) 訳者所有の古絵葉書より。

大運河の途中は、水路で囲まれた粗野な低湿地で、田舎住宅も見える。

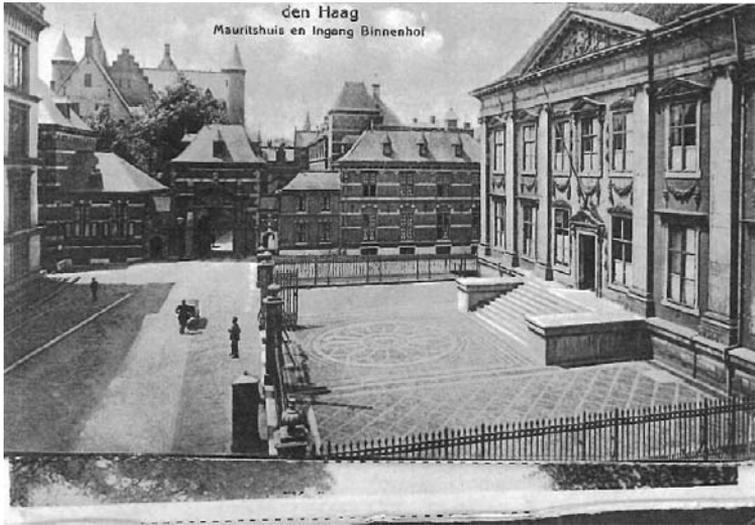
5マイルあるハーグへ、およそ1時間要する。運河のへりには木が茂り、田舎住宅は数えきれない。路程の終りには、運河が狭まり、鴨の羽のような緑色である。

ハーグ。絶景。

6月24日

博物館⁵〔モーリシャス美術館〕〔図13.参照〕。原寸大で描かれたポール・ポーター作の雄牛は力作である。〔レンブラントの弟子の〕ヘラルト・ドウ(Gerard Dow, 1613-1675)。フランス派の模倣。王宮⁶。森の中の宮殿⁷。〔漁村〕ヘルモント(Schev-

図13. モーリシャス美術館



(注) 記者所有の古絵葉書より。

図14. オランダの低湿地



(注) 記者所有の古絵葉書より。

eling) [現在のスヘーヴェニンゲン] へ。

船でライデンへ。帰路の初めはデルフトからと同じ経路で、運河の左側には田舎邸宅が、右側には低湿地が広がっている。後半の路程は穀物畑ではなく、低湿地〔図14.参照〕が続く。〔ホテル〕リオン・ドール (Lion d'Or) へ。

6月26日 (日曜日)

聖ピーター教会。ボレハネ (Borehane) の墓。卓の周りで sacrament が座って施されている。フランス教会式の説教。植物園⁸。

6月27日（月曜日）

博物館⁹。良き収藏品。鳥類はいまでもアムステルダムに生息している。鳥類向けに新しい建物が建造中である。

〔切り妻屋根をしたバロック様式の家並みが見られるライデンの〕大通りは見事で、絵のような通りである。ラーペンブルフ（Rappenburgh or Rapenburg）は期待外れで、全くロッテルダムに匹敵しない。

ティドマン教授。大学の学長にして、行政長官。1年毎の選挙。農場は総じて小さく、10, 20、及び30アルパン（arpent）〔メートル法導入以前のフランスで用いられていた面積の単位で、およそ1エーカー〕である。夏季の労働の価格は大体1フロリンで、冬季には仕事は不足する。17, 18世紀以来、多数が土地生産物のはけ口の不足に悩まされている。羊毛業は衰退気味である。親方は働き手によって達成された全部を吸い上げようとはしないであろう。わずかに限定された日数における一定量だけを得ているに過ぎない。ライデンの人口はベルギーやフランスの大抵の町と同様に減ってきている。

ローマ法に従えば、相続の権利である。

法律の担当のティドマン教授は経済学の1講座を提供している。ラテン語の講義の方は芳しくない。

羊肉は3ペンス、牛肉は4ペンス、また1ポンドのパン^[13]は1.5ペンスである。

船（boat）で4時間、ハールレム（Harlaem）へ。〔ホテル〕ゴールデン・ライオン（Golden Lion）はあるフランス人1家により経営されている。

運河、両側は主として低湿地、終盤に入ると、土地はかなり高くなり、立派な木々。砂丘も目を引いてくる。清々しい気持ち良い町。赤色の家屋は白で装飾されている。切り妻屋根。オランダで最大の教会。運河はライデン（ラーペンブルフ）よりも精巧であるが、家屋はそれほど大きくはない。

6月28日（火曜日）

コスター（Koster）作の彫像。町の庁舎にある5枚の原型。最初の2つは木製版で、続いての可動できる3つの手本は金属製のように思えた。疑わしいが、1420年に下作業が開始され、1439年に他界したと言われている。伝えられているこの印刷された日時は1440年¹⁰（原文のまま）以前とある。

聖書。紙書籍（Speculum Salutis）。

〔1755～8年に作製され、ハールレム〔図15.参照〕の聖バフォ教会にある、5千もの管をもつ〕オルガン。羊肉と牛肉はポンドあたり5シリング。

ハールレムの周囲はこれまでに見たオランダの他のどんな町よりも変化に富み、

図15. ハールレム光景（20世紀初め）



（注）訳者所有の古絵葉書より。

快い。

6月29日

1頭立て2輪馬車（Voiture）でアルクマールへ。砂丘。多様な種類の木々、そして左手に多数の大きな田舎住宅。ベヴェルウィック、アルクマールは心地よいオランダの町である。切り妻屋根。森の中を散策。城壁¹¹。ザ・ホルダーを経てアムステルダムへ通じる運河へ。

オランダに特有の船旅、サルム川やアイ川。沿って、2,3マイル進むと、緑を帯びた赤色や、青白い色をした端正で固有の家並みが目に入り、終着はザンダムである。ピーター・ザ・グレートの小屋¹²。アムステルダムのアイ川〔アムステル川のこと〕を横切って。フランス風の劇場へ。

7月1日（金曜日）

王宮や新教会へ。

7月2日（土曜日）

博物館へ。絵画のコレクション、すべての閲覧室は閉まっている。レンブラント（Rembrandt Harmenszoon van Rijn, 1609-1669）の『夜警』（1642年に完成）。ヘラルト・ドウの恩師。バルソロメウス・ファン・デル・ヘルスト（Bartholomeus van der Helst, 1613-1670）。海の一環であるアイ川。アムステルダム港。デ・ラウター（Michiel Adriaenszoon de Ruyter, 1607-1676）とモンク（George Monck, 1st Duke of Albemarle, 1608-1670）との1666年の第2次英蘭戦争。デ・ラウターの別な戦闘〔1672年の第3次英蘭戦争〕など。ウーサーマンズ・テニールス（David Teniers, 1610-1690）などの絵。

障害物（Brock）。広範囲に及ぶ洪水。巨万の人々がその修復に雇用されている。1日当たり1フローリン4スタイバー〔1スタイバーは半ペニーに相当〕、すなわち2シリング。これは夏季における労働日の通常価格である。木靴はありきたりで、素足のままの婦人というのはオランダでは珍しくない。概して、普通の人たちの衣服はまあまあである。ロッテルダムで本船積み込み時の平均的な品質の小麦の平均価格（ただし、最低価格は含めない）は1814年から1825年にかけての11年間ではクオーターあたり34シリング8ペンスであった。1820年から1825年にわたる5年間の平均は31シリング3ペンスで、1825年に関しては、22シリング8ペンスであった。B氏。

7月3日（日曜日）

〔オランダ改革派のアルミニウス派信徒向けのプロテスタント教会である〕監督教会（Episcopal Chapel）へ。説教。

アムステル橋。カイザー・グラヒト〔Gracht、「町の中の運河」という意味〕、ヘーレン・グラヒト。プランテージ（Plantage）¹³。ハールレム門の傍の庭園。美しい世界。あらゆる人たちがパイプ〔管〕をもっている。

7月4日

船でユトレヒトへ。アムステルダムの素晴らしい川〔図16.参照〕、田舎住宅。ウェクト（Vecht）川である。広大な低湿地が水路によって分離されている。運河よりも低地。すぐ近くにレク川の閘門（Elevation）。大きく、快適な田舎住宅。その後、粗悪なもの以上に見劣りがするユトレヒト〔の大聖堂〕の入場許可書を分ける〔図17を参照〕。

図16. アムステルダムの川の風景



（注）訳者所有の古絵葉書より。

〔高さ112メートル余りの大聖堂の〕塔。展望¹⁴。散歩。森。

7月5日（火曜日）

長距離乗合馬車でブレードーへ。土地が高くなるにつれ、まずは牧草地が水路で区分されている。その後、麻、じゃがいも、ライ麦等の見事な作物、レク川やワール川を過ぎると、ライン川や〔ベルフセ・〕マース川の広がりによって形成された水を湛えた支流。行程の終わりには、極普通の田舎で、ヒース、モミ、そして囲い地に分けられる。

ブレードー。ナッサウ・エンゲルベルト二世伯爵（Engelbrecht the Second Count of Nassau, 1451-1504）の墓¹⁵。ミケランジェロ（Michael Angelo, 1475-1564）。防備のための城壁、散策。

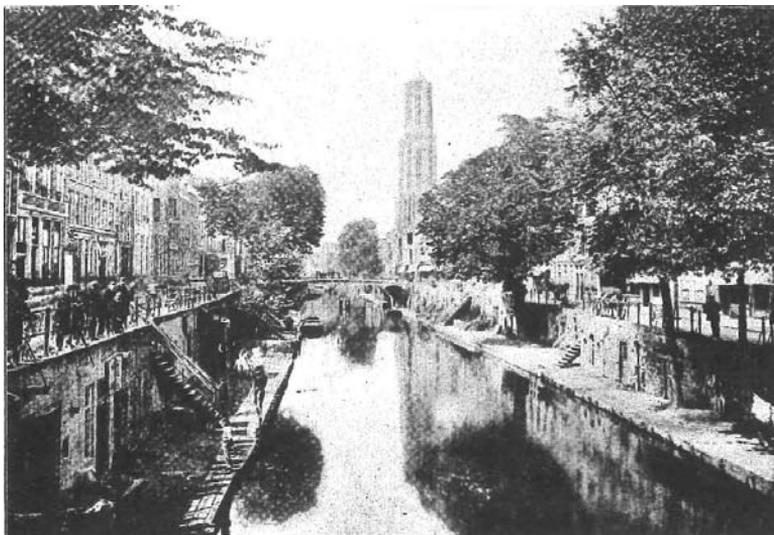
7月6日

長距離乗合馬車でアントワープへ。この地の印象は実り良いライ麦、若干の囲い地やヒース。それに明らかに毛虫によって落葉したオークを中心とした木々。大教会と博物館。ルーベンスやヴァン・ダイク。大半の品（articles）は廉価で、人々は怠惰と言われているが、労賃はオランダ全般よりは低目で、極めて普通の働き手は週に5フラン以上を稼ぐことはない。

7月7日

1頭立て2輪馬車で〔フランス風にはフランダースのメヘレンである〕メヘレン（Malines）へ。ライ麦、小麦、亜麻は極めて好作柄で、ライ麦の幾らは収穫され

図17. ユトレヒトの運河と大聖堂の塔



（注） 訳者所有の古絵葉書より。

ている。とはいえ、この地は必ずしも平坦というわけではない。藁葺屋根の小屋、2頭立て4輪馬車を追いかける子供たち、オランダでは目にしなかった。

メヘレンは良き住宅と空き地をもったとても清潔で、心地良い装いをした町である。ルンボルド大聖堂の聖年(Jubilee)、とても素晴らしい塔¹⁶〔前掲の図9を参照〕。ヴァン・ダイク作のキリスト受難の絵。聖ヨハネ教会。ルーベンスの絵画。キリスト降誕を祝いに来た東方の三博士(the Magi)への礼拝図。聖ヨハネの殉教〔福音書に基づき、沸騰する油に投身〕図。ヨハネの斬首刑図、洗礼者ヨハネ図は(3つの誓いのためにここから持ち去られ)まさにパリにあったけれども戻された。

ノートルダム教会〔同名の3つの教会があり、その内のN. D. オ・デラ・デ・ラ・ダイル〕のルーベンス作の目を見張るばかりの魚類の下書きはとても精密である。

ルーヴェンへ。この地は必ずしも平坦ではない。ライ麦、小麦、亜麻は大変好作物柄である。多くの子供たちがさほどは貧相な姿をせずに2頭立て4輪馬車を追っかけている。それに藁葺小屋。メヘレンの塔がメヘレンからルーヴェンにまで伸びている並木道の中心地からぴったり15マイルであることを示していることを除けば、見た目はイングランドと同様である。

〔1448年に建造された〕町庁舎(Hotel de Ville)はゴシック建築の美しい実例であり、一風変わっている。見応えある教会〔町庁舎の向こう側にあるピータース聖堂〕。大学図書館の優れた読書室。4講義、16人の教授、ただ神学はない¹⁷。

7月8日(金曜日)

ナミュールへ。ここはずっと小高く、イングランドと同じくかなり気持ち良い。共有牧草地が殊の外多く、白いポプラも目立つ。粗悪な小屋、幾つかは朽ち果てている。その貧相が伺われる。途上で小さな宿屋で上等なコーヒーと朝食をとり、ナミュールまで急な丘を下っていく。

7月9日

ナミュールはサンプル川とムーズ川の合流点である。サンプル川はとても小さい。ムーズ川の水嵩は低く、思っていたよりも小さい。川の両岸は樹木の茂った岩場であり、時として画趣を促される。しかし高くはない。ところで(Huy)。チョコキエール城は大司教の旧邸宅である。頻出してくる村落や田舎。この地には、鉄鉱山や石切り場があり、採石の通常労働は約1フランである。現在、製造業者達にある運動が見られ、政府は近隣よりも自由にとって好都合なものとしてこの動きに賛同している。フランス側から開始され、フランスとネーデルランドとの間で採択され、この2年存続されてきている禁止制度^{〔14〕}に対しては不満たらたらである。

7月10日（日曜日）

長距離乗合馬車でアーヘン（Aix la Chappelle）へ。リエージュは少しばかりバースのような境遇にある。バース地方に似たアーヘンまでの道のりの始めには、草の多い小高い囲い地、藁葺屋根の小屋、及び丈夫な（rich）垣根の連なりがあった。

要するに、リエージュからアーヘンまでの地はイングランドの幾つかの最良の地方（parts）に劣らず、奇麗で、変化に富んだ、丸味を帯びた丘陵地にも似た地方に他ならない。プロイセンの国境を越えると、幾許かのヒース。また青色の仕事着（frocks）が一般的である。

アーヘン。混み合った通り、7年前には遺物品（Relicks）の展示会があった。シャルル・マーニュ教会。〔9世紀にカール大帝の宮廷のあった地所に、14世紀に建てられた〕町の庁舎、カール大帝（Charlemagne, 742-814）の像。散策¹⁸。

7月11日（月曜日）

デュレンを経由してケルンへ、悪路。途次の最初は変化に富み、結構な美観であった。森林、せせらぎ、デュレンの織物製造業者たち。そして川の流れはこの町を支えている。水車場。製造業者が使っている通常労働は1日あたり20スーから24スーもしくは30スーである。デュレンを後にすると、広漠な平坦な共同耕作地が出現、でも悪土壌で、貧弱な農業である。干上がった砂地。一方、ケルンの平原は良好な作物で、大麦は収穫されていた。

ケルン。聖ペテロ教会、ルーベンス作の聖ペテロの受難の絵。見事であるが、じっくりと鑑賞するには黒味がかっている。ライン川。船で橋へ。

7月12日

1頭立て2輪馬車でコブレンツへ。朝食。ボンへ。ゴデスベルクまでは美しい場所はない。7つの山々。ドラヘンフェルス（Drachenfels）へ。ドラヘンフェルスを過ぎると、実に見応えのあるえも言われぬ光景が広がった。レーマーゲンでディナー。修道院は抜群の眺め。アンダーナツハ盆地（Valley）が広々としていて、コブレンツまで胸をわくわくさせる。ぶどうの木々が至る所に植えられていて、丘の大半を覆っている。レーマーゲンでの通常のラインワインはビンゲン産である。コブレンツ〔図18参照〕。要塞。モーゼル橋、ライン川の合流点まで徒歩。エーレンブライトシュタイン。

破壊されている要塞。またライン川沿いの町や村落の見掛けは古びて、退行しているかにみえる。人々は貧しいように見え、婦人達や子供達は素足である。

7月13日（水曜日）

マインツへ。ライン川の圧巻はコブレンツからビンゲンまでの絵のような美観〔図

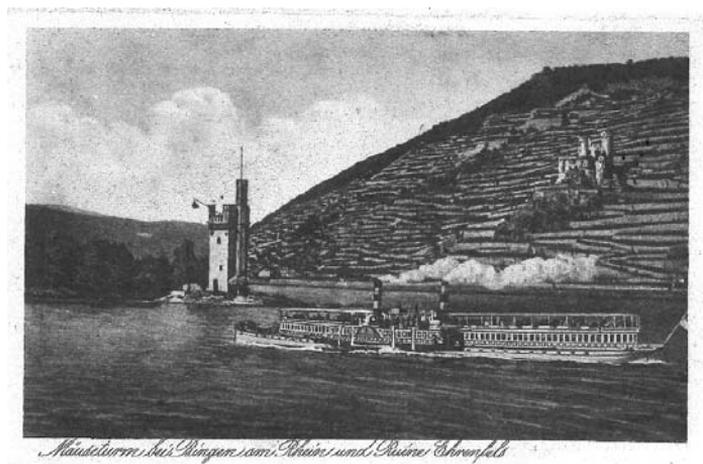
図18. コブレンツの20世紀初めの光景



（注）訳者所有の古絵葉書より。

19を参照]である。そこは荒廃した城、そして人目を引く様相を呈している町や村落で満ち溢れている。集落は遠目には全くもって申し分ないように映る、かつ古めいた城の頻出はこの風景に極めて特徴的で際立った色合いを加味している。中世時代の素晴らしい「ドイツ風の作法（Transactions）の演劇」。カーネックのラーン古城とストレッツェンフェルス城の跡地¹⁹とが重なり合う。レンス。ケーニヒストゥールの王座。ヴァーツラウス（Wenceslaus, 1361-1419）皇帝の気質。マルクスブルク〔ナポレオン戦争で不具者となった退役軍人達が1825年に収容された〕の城。レベンシュタインとスターネンフェルスの古城とは兄弟。ポッパルト。フランク王

図19. ビンゲン付近の美観



（注）訳者所有の古絵葉書より。

国の国王たちの宮殿。マルクスブルク修道院。ルーリーベルクと呼ばれる素晴らしい岩[ただし、マルサスは格別にはこの岩に注視していない]。シェーンベルク城。オーバーヴェセル。カウブ近くのゲーテンフェルス城。スタールベルクの古城。ファーステンダール修道院。アスマンスハウゼン村、赤ワイン。

ビンゲンからは道がライン川から離れた。その地は少し退屈で、大半が共同耕作地であり、寒くて大変痩せている。

7月14日

マインツ着。絵画のコレクション（良くも悪くもなし）。ローマの古代遺物がマインツ近辺にある²⁰。ライン川とマイン川との佳景〔図20.参照〕、そしてマインツの町。人々はヘッセン＝ダルムシュタット方伯ルートヴィヒ10世（Hesse Darmstadt, 1753-1830）との戦いを交えなかった。そのフランス人（御者）の監督下で良い暮らし向き。町には3千人のオーストリア人とプロイセン人とが駐屯し、防備はとても強固。

図20. マインツの20世紀初めの佳景



（注）訳者所有の古絵葉書より。

7月15日（金曜日）

船でコブレンツへ²¹。ライン川の広さ（broad）や川岸は楽しかったけれども、以前にビンゲンで覚えたものには及ばない。左手には、[ライン渓谷中流上部にある]プファルツやラインシュタインの城、右手には、エフェンスフェルス（Ehensfels）。塔を頂くオーバーヴェセルの壁塀。ライン川の目立つ所の上にあるラインフェルスの石製要塞の聖ゴアイ（St Goai）。ボツパルトの修道院と城。カペレは教会のあるラーンの盆地の入口である。そして城、プストルゼンフェルト（Pstolsenfelt）城。

レ氏温度計25°。

7月16日

コブレンツにあるノートルダム・カルトジオ修道院の偉観。プロイセンの皇太子が教会の面倒をみるようになったことは十分に受け入れられている。新しい要塞、それに至る所で古い兵舎が修繕されている。なおエーレンブライトシュタイン要塞はほぼ完成している。

7月17日（日曜日）

船（boat）でケルンへ。目にした景勝はドラヘンフェルス付近を除けば、上記のコブレンツの美景に勝るとも劣らない。7つの山の1つの壮観は決してライン地方のどんな山よりも見劣らない。ドラヘンフェルス²²に視線を移せば、これまでになく懸絶地で、その美景たるや思わず食事を中断したほどである。ボンの町の光景も近付くにつれ、良くなったけれども、町の中は酷くみえる。

7月18日

ケルン。大聖堂〔図21.参照〕は未完成ではあるけれども、とても素晴らしい。午後にはユーリッヒへ、大変暑かった。ホテル・レインベルク・ケルンの支配人によれば、昨日は日陰にある温度計でレ氏温度計27°で、カ氏温度計99°〔実際にはカ氏温度計93°に相当〕。

図21. ケルン大聖堂の内部



Kölner Dom: Innenansicht

（注）訳者所有の古絵葉書より。

7月19日

アーヘンへ。おおむねライ麦と大麦とは収穫の最中である。小麦はまだである。ケルンからアーヘン近くまでは主としてシャンパン地方である。

7月20日（水曜日）

悪路を通過してマーストリヒトへ。ほどなく崖で横転。馬が底部で目を丸めていたが、殆ど無傷で救出。とても若い御者である。かなり酷い地方で、マーストリヒト付近には共同耕作地がある。取り入れの最中である。マース川の水位は低く、川沿いを散歩。小さな家（Town House）。教会は200平方フィートで、立派な私的住宅である。遠方のセント・ピーターズ・ヒルや遺跡²³以外には、見物するに足るものはない。

7月21日

長距離乗合馬車で、トンヘレン、シント・トロイデン、ティルレモント〔ティネン〕、及びルーヴァンを通過してブリュッセルへ。肥沃な共同耕作地が幾許かの丘と白いポプラに覆われた森に変化を与えている。この旅の終わりには、ライ麦はすっかり取り入れられ、小麦は収穫中となっていた〔図22を参照〕。

図22. 収穫物の運搬



（注）訳者所有の古絵葉書より。

原註

1. ドロシー・ワーズワース（Dorothy Wordsworth, 1771-1855）も王立公園内にあるホテル・ベル・ビューに宿泊し、「それは正方形の王宮に見える」と記している。女史の言葉を拝借すれば、その公園は実に広大なオープン・スペースで、かつまた、日陰の散歩道、彫像、噴水、遊泳場、樹木、観客席に恵まれ、しかも王宮や見事な家屋に包まれている〔デ・セリンコート

(Aubrey de Sélincourt, 1894-1962) 編『日記』第2巻、24頁)。

この40エーカー越えの公園に関して、ベルギーはオーストリア人の仕事に負っており、1776年にオーストリア人の建築家ツィナーによって設計された。

2. ドロシー・ワーズワースは1820年7月に、アレ・ヴェルトをブリュッセルのハイド・パークとたどっている。「そこはイギリス人貴族から中産階級までの様々な4輪馬車 (chariot) (彼らのごちない乗り物は極めて面白かったけれども)で溢れ返っている、そこはまるでジョニー・ギルピンが祖母から母の胸に抱かれた赤ん坊までの家族全員を同乗させた軽装の1頭立て2輪馬車^[15] (chaise) で充満している。…車道の片側では、市が立っていて、喫煙や飲食用のブースがあり、飲食店や小装身具や玩具で賑わっている」と記している (デ・セリンコート編『日記』第2巻、27頁)。
3. ナゲルの案内書によれば、アントワープでのフランス風ノートルダム大聖堂の変造は1794年のことであり、また1802年には礼拝のために再建された。ルーベンスの絵は1816年に取り換えられた。
4. アントワープにある聖ジェームズ教会はその先祖を納体堂や墓に収めた私的家族向けの礼拝堂として名高い。「プーチン家」とはプランチン家のことであり、ルーベンスはその礼拝堂を装飾している。マルサスはおそらく「ヴェルヴォールト氏による不滅を象徴した肖像」について混同している。その南側の翼堂には、ファン・デル・ヴォールトが彫刻した『キリスト昇架』の高浮き彫りがある。ギーフス (Jozef Geefs, 1808-1885) 作の『臨終のキリストと不滅』の像はルーベンスの礼拝堂に近い回廊にある。
5. ハーグにある博物館はヨハン・マウリッツ・ファン・ナッサウ伯爵 (Count John Maurice of Nassau, 1604-1679) のために17世紀に建てられたモーリシャス美術館のことである。1821年からは画廊として利用されるようになり、オレンジ家の王子達の収藏品からの逸品が収めてある。ポール・ポーターの雄牛はいまなおヘリット・ドウ (Gerrit Dou) の見本としてそこにある。
6. 1640年にピーター・ポスト (Pieter Jansz Post, 1608-1669) によって建造された「王宮」は現在では社会研究の国際的研究所になっている。
7. 「森の中の王宮」はまさに17世紀のハウス・テン・ボスであり、加えて1748年には左右の突出物が追加された。生い茂った森の公園に立っている。
8. 1575年に建てられたライデンにある聖ピエテルスカーク教会には大学教授達の記念物が収めてある。ヘルマン・ブールハーフェ (Herman Boerhaave, 1668-1738) は18世紀の高名な医学の教授であった。植物園は1587年に設置された。
9. 自然史博物館はオランダの植民による動物のコレクション、わけても鳥類のテミンク (Coenraad Jacob Temminck, 1778-1858) ・コレクションで名高い。
10. ローレンス・ヤンスーン・コスター (Laurens Janszoon Coster, 1370-1440) 作の像は今日もハールレム (Haarlem) にある10の通りの結び目であるグローテ・マルクト広場に置かれている。彼は1370年にハールレムで生まれ、1440年に死去した。オランダ人の語るところでは、彼は事実上移動式印刷術を考案した。その死後、1人の徒弟がマインツに出かけ、そこで通常には印刷術の父とされるグーテンベルク (c.1400-68) と共に事業を立ち上げた。
11. アルクマールの城壁は今では公共の庭園となっている。
12. ピョートル I 世 (Aleksievich Pyotr, 1672-1725) であるピーター・ザ・グレートは1697年にザンダムで造船術をならった。「ツァール・ピーター・ハウス」は今日も保存されている。

13. プランテージは植物園が存し、アムステルダムのユダヤ人の旧住居の東部にある地区の名称。
14. ユトレヒト大聖堂の塔はオランダの教会の中で最高の塔である。それは大多数の建物からは超然としていて、高さ367フィートである。(458段で疲れた) ベデカーは、328フィートでも、「大舞台からの素晴らしい眺望である」と評している。
15. マクシリアン I 世 (Maximilian I 1459-1519) の下でネーデルランドの総督を務めていたナッサウ・エンゲルベルト II 世伯爵の雪花石膏のような墓は、今でもブレーダーの大聖堂の展示品である。今日では、トマス・ヴィンシドール (Tommaso di Andrea Vincidore, 1493-1536) か、あるいはピエトロ・トリジアーノ (Pietro Torrigiano, 1472-1528) かのいずれかの作品とされている。
16. メヘレンにあるルンボルト大聖堂は570フィートの高さの塔を誇り、キリスト教世界で最高と位置付けられてきた。しかし実際には未完の318フィートとなっている。ウィレム I 世は1578年に防備のために建造資材を接取した。
17. ルーヴェン大学は1425年に創設された。1432年以降は聖職者用のホール (the Closs Hole) を設けていたけれども、1914年にドイツ人たちがこれを焼失させた。16世紀には、50のカレッジに6千人の学生を収容していた。18世紀に至っては、オーストリア・オランダ [1713-95年] の高官の中でルーヴェンで教育を受けなかった者は誰一人としていなかった。
18. 一行の「散策」はエリゼンガルテンで行われたであろう。そこは1824年に建てられた新古典的なポンプ室の背後に配置され、バイエルンのエリザベス女王 Princess Elisabeth of Bavaria, 1801-1873) もそう呼称した。女王は1840年にプロイセンのフレデリック・ウィリアム IV (Frederick William IV of Prussia, 1795-1861) となった皇太子の妻となった。彼は主として極端な反自由主義の見解で名高い。けれどもマルサス一行の旅行の際には、30歳の若さでラインラントの繁栄と大衆受けを成就するために尽力したことを忘失してはならない。1842年に、彼は1248年に開始され、1880年に完成したケルン大聖堂の仕上げに着手した。
19. 「ストレッツェンフェルス城の跡地」は1823年にコブレンツ市民の手でフレデリック・ウィリアム皇太子に譲渡された。皇太子による修復は19世紀のゴシック建築の典型例である。皇太子は夏場の避暑にそこを使用した、また彼の未亡人は1873年までそこで暮らしていた。
20. マイントは紀元前11年にドルススが基礎を築いたモゴンティアカム [軍事的拠点] であった。それゆえにトルスナー (Dorsner) 庭園となっている。
21. 他の多くの旅行者と同様に、マルサスの一行も道沿いにライン川を上り、それから改めて船で下っていった。なお、ライン川における船便の当時の概況については、さしあたり、クラパム著林達訳『フランス・ドイツの経済発展』(学文社、1972年) 上巻125-6頁、ギュンター・フランツ著高橋清四郎訳『ドイツ穀物取引史』(中央大学出版部、1982年) 204頁、及びF.W.ヘニング著林達・柴田英樹訳『ドイツの工業化 1800-1914』(学文社、1997年) 62-3頁等を参照。
22. ノンネンウェルスは百エーカーほどの島で、今は少女向けの学校になっている。12世紀に建てられたこの女子修道院はナポレオンによって押収せられた。しかしジョゼフィーヌ (Joséphine de Beauharnais, 1763-1814) は修道女たちがそこにそのまま亡くなるまで住めるようナポレオンに願い出た。こうして、プロイセン人たちはその取り決めを享受した。1823年頃には、島は売却され、この女子修道院は「ゆったりとして広いホテル」となった。
23. ピーターズベルクにあるセント・ピーターズ・ヒルは標高404フィートで、マーストリヒト

から南へ2・5マイルである。そこは石切り場のある蜂の巣状の六角形で、ローマ時代から19世紀に至るまで使用されてきた。軟石もわけなく見つけられるけれども、大気に触れると固くなる。石柱は屋根を支えるのに持ち出され、今日では300を上回る回廊からなる迷路のみが残っている。

訳註

- [1] 1814年1月にダンバートンで進水した外車船マージェリー号（長さ19.2メートル、10馬力）は郵便輸送をも兼ねていたが、テムズ川で就航した後、フランスに売却され、「初の英仏海峡横断蒸気船」となった〔田中航著『蒸気船』（毎日新聞社、1977年）40-1頁〕。また、ロブ・ロイ号（90トン、30馬力）は1813年6月から夏季限定でグラスゴー＝ベルファスト間を週に2回航行し、1820年に至り、フランスに買収され、英仏海峡横断航路を開設した〔上野喜一郎著『船の歴史 第3巻』（天然社、1958年）99-100頁〕。ちなみに、当時の蒸気船の速度は10キロ余りであった〔本城靖久著『馬車の文化史』（講談社、1993年）249頁〕。なお、18世紀末の様子ではあるが、当時のドーヴァーやカレーの一斑については、本城靖久著『グラント・ツアー』（中央公論社、1994年）50-61頁を参照。ちなみに、マルサス達もカレーでは税関による手荷物検査を受け、旅行鞆を封印していた鉛を解かれたことであろう〔同書55-6、67頁、またP.スラッファ編堀経夫訳『デイヴィド・リカード全集第X巻』（雄松堂、1970年）225頁も参照〕。
- [2] 厳密に言うなら、フランス版の郵便馬車のことで、例えば、中産階級用の「フランスのデリジャンスはまるで黄色く塗られた巨大なノアの方舟のようだった。それは猛烈な音をたてて街道や敷石の街路をがたがたと揺れながら駆け抜けるのだった」と描写されている〔ラスロー・タール著野中邦子訳『馬車の歴史』（平凡社、1991年）430-1頁、また同訳書395頁や、鹿島茂著『馬車が買いたい！』（白水社、1990年）17-32頁、並びに本城『馬車の文化史』98、121-7頁も参照〕。
- [3] マルサス一行は、おそらくは額面25ポンドの金貨を1パーセントのプレミアムを支払って、「1ポンドあたりわずか25フラン」でポンド貨のフラン貨への両替をなしたと考えられる〔『デイヴィド・リカード全集第X巻』236、245、263頁を参照〕。
- [4] スーは、「アンシャン・レジームの正式通貨であったリーヴルの補助通貨で、1リーヴル＝20スーという換算率で流通していたものである…1803年の通貨改革でリーヴルに代わってフランが正式通貨として採用されたあとも…1フラン＝20スー、1スー＝5サンチームとして第一次世界大戦の頃まで民衆に親しまれた。」と解説されている〔鹿島前掲書160頁〕。
- [5] フランスの農業労働者は、一般に、家計費のほぼ半分を〔大抵は自家製の〕パンに充て、大体、1日に550～750グラムを口にしていた〔ステイーヴン・カプラン著吉田春美訳『パンの歴史』（河出書房新社、2004年）99頁、また鹿島前掲書167-9頁やG.ルフラン著小野崎晶裕訳『労働と労働者の歴史』（芸立出版、1981年）189-91頁を、あるいはルイ・シュヴァリエ著喜安朗ほか訳『労働階級と危険な階級』（みすず書房、1993年）252-4頁を参照〕それゆえに、「月に2度しか肉を食べないし、ぶどう酒を飲まない」という窮状にあったとされている〔ジョルジュ・デュブー著井上幸治監訳『フランス社会史』（東洋経済新報社、1968年）139頁〕。また、アルザスの日雇い農の労賃への言及ではあるけれども、「1805年の16スーが

- 1835年には1フランないしは1フラン50サンチーム（食事なし）に」なると例示されている〔湯村武人著『フランス近代農村の構造』（法律文化社、1967年）234頁、また同書269-71頁も参照〕。
- 〔6〕丸味を帯びた底部をしたカレシュは折り畳み式幌付きの4輪馬車で、「手綱なしの4頭の馬で引かれ、そのうちの2頭には馭者が騎乗した」と略説されている〔タール前掲訳書409-10頁〕。
- 〔7〕イギリスは1803年に旅客法を制定していたが、さほど厳格には施行されていなかっようである〔ジョン・トーピー著藤川隆雄訳『パスポートの発明』（法政大学出版局、2008年）108-112頁、また本城前掲書34-6頁も参照〕。また、マルサス達の荷物もせいぜい「衣装箱5個と2個の大旅行かばん」程度であったと推される〔『デイヴィッド・リカード全集第Ⅹ巻』231頁〕。
- 〔8〕亜麻栽培の農繁期（通常は2～3日）には、除草と収穫とのため多大な人手を要した〔R. ブラウン他篠塚信義ほか訳『西欧近代と農村工業』（北海道大学図書刊行会、1991年）186頁〕。
- 〔9〕N.C.G.パウンズ著桜井健吾訳『近代ヨーロッパの人口と都市』（晃洋書房、1991年）51-3頁、並びにJ・ド・フリース、A・ファン・デア・ワウデ著大西吉之・杉浦未樹訳『最初の近代経済』（名古屋大学出版会、2009年）617頁。なお、エルバーフェルトやハルメンに関してではあるけれども、村山聰著『近世ヨーロッパ地域試論』（法律文化社、1995年）第10章は有益。また、モーリス・ブロール著西村六郎訳『オランダ史』（白水社、1994年）107-15頁、梅津順一・諸田實編著『近代西欧の宗教と経済』（同文館、1996年）第1章、及び中野智世ほか編著『近代ヨーロッパとキリスト教』（勁草書房、2016年）第5章にも示唆が含まれている。
- 〔10〕新生ホランド王国はフランスによる併合時（1810年7月-13年）に偽装乱発された公債の破棄をなし、例えば、「利払いを従来の3分の1に減額した」と概説されている〔J・ド・フリースほか前掲訳書116、625頁、また森恒夫著『フランス資本主義と租税』（東京大学出版会、1967年）81-8ページも参照〕。
- 〔11〕取り敢えずは、J・ド・フリースほか前掲訳書544頁を参照。但し、イングランドの長老派は非国教会のユニテリアン派へと変容していったし〔山本通著『禁欲と改善』（晃洋書房、2017年）154、177、191-3頁〕、また、スコットランドの長老派も国民的な長老主義の一環を占めていたものの〔浜林正夫著『イギリス宗教史』（大月書店、1987年）216-18、228頁〕、通常は非国教派に分類されている〔梅津・諸田前掲書156頁〕。なお、言うまでもなく、非国教会徒達は総じて、「法律で強制的に徴収され、教会の収入にとなった」教会税等〔例えば、1818年には、英国国教会を新しくするのに「100万ポンドの出費」が認可された、L・C・B・シーマン著社本時子ほか訳『ヴィクトリア時代のロンドン』（創元社、1987年）25頁〕に対して違和感や反感を抱いていた〔木下智雄著『イギリス人の宗教行動』（聖公会出版、2013年）31、38、66頁、また金子勝著『市場と制度の政治経済学』（東京大学出版会、1997年）67-8頁も参照〕。とはいえ、1830年代に至っても、「副牧師のうち、その半数が法律で定められた最低賃金の80ポンドを切る収入しかなかった」のも事実である〔リチャード・D・オールティック著栗田圭治ほか訳『ヴィクトリア朝の人と思想』（音羽書房、1973年）222頁、また浜林正夫前掲書187頁や山本通前掲書148頁も参照〕。
- 〔12〕マルサスが「ボート」と記載している時、それは漕ぐ小舟でもあれば、また船頭が「急流

に掉さして小舟を操る」場合もありはするけれども〔『デイヴィド・リカード全集第X巻』262、286頁を参照〕、原則、「ここにいうボートとは、この地方の内国航行用に使用される小型の船のこと」〔『デイヴィド・リカード全集第X巻』238-9頁〕を指している推断される〔J・ド・フリースほか前掲訳書166-75頁、とりわけ175頁の表5-4には注目〕。

- [13] 19世紀初頭のオランダにおけるパン用穀物の1人あたりの年間消費量は100キログラム程度で、他方肉のそれは30キログラム弱であった。また、食費に占めるパン消費の割合は3割程度であった〔J・ド・フリースほか前掲訳書588-91頁〕。ちなみに、パンが食糧費の3～4割を占めていたイギリスの労働者家庭はポンドあたり大枚9ペンスほどを投じて、1人あたり0.6～0.8ポンド程度の（上等）肉を平らげていた〔友松憲彦著『近代イギリス労働者と食品流通』（晃洋書房、1997年）54頁、並びに同著『近代イギリスの日用品流通』（晃洋書房、2016年）15、20頁〕。
- [14] フランスが「1821年と1822年の法律によって」強化した保護関税に対して〔ジョルジュ・デュブー前掲訳書36頁、またクラバム著林達監訳『フランス・ドイツの経済発展 1815-1914年』（学文社、1972年）上巻83頁も参照〕、例えば、「オランダは1851年まで、ライン川における自由な通過貿易を頑なに禁止し続けた」〔J・ド・フリースほか前掲訳書478頁、また同訳書464-5頁も参照〕。
- [15] これについては、「シェーズと呼ばれる1頭立て幌付き2人乗りの軽快な2輪馬車」と約言されている〔本城『グランド・ツアー』57頁〕。

現金勘定

本現金勘定は大陸旅行の支出を洩れなく、かつ事細かく示している。その総額は200ポンド足らずに達する。その内の155ポンドは海外でフラン、あるいはフロリンのいずれかで用いられている。その際、1ポンドは25フランと、また11・8フロリンと換算されている。

フランでの支出は3段目に、ナポレオン金貨（20フランまたは16シリングに相当する）、フラン、及びサンチーム（7月8日には、サンチームは20スーから1フランで交換されている）で表示されている。フロリンでの支出も同様にウィリアム金貨（10フロリンあるいは17シリングに相当する）、フロリンで示されて、20分の1フロリンにあたる少額の引き下げがあった。

7月23日までは、「〔受け取り〕収入」はスターリングのみで示されている。他の通貨で記載されている支出に対しては、相応の修正は一切なされていない。マルサスが現金を計算した日付を入れ、それから収入と支出の両方の勘定に通貨単位で記入し、かつその際〔通貨換算の〕整然とした釣り合いを試みた。

不運にも、収入の記載は不正確であるように思われる。というものも、200ポンドの支出に対して純収入額（drawings）は160ポンドしか示されていないようにみえるからである。

受領書がうっかりして書き落とされたゆえに、7月23日に集計された現金がその勘定によって裏打ちされる名目よりも（ポンドの価値にして）10ポンド超過していることが分かる。また、6月23日時点でマルサスの保有していた勘定上の528フランがどうして7月8日には1270フランまでに増えたのか — ポンドに直せば、30ポンド足らずの増加になる — をも説明しよう。ただし、記載された受領書が全く見つからず、かつまたマルサスが一旦終止符を打った後に、フロリンで記入している支出の大半を彼のフロリンの保有額と一致させていないならばである。

支出の上部にある小見出し£.s.d.は6月10日から始まるが、マルサスの勘定に関しては正確で、

一点の曇りもない。しかし左側の縦列の行からや、マルサスの勘定の作成方法自体から誤記が生じている。その結果、左手側の数字はナポレオン金貨、フラン、及びサンチームになっている。